

外食場面における外部割り込みからの話題再開ストラテジー

小笠弘子 (立命館大学学部生) 岡本雅史 (立命館大学)

1. はじめに

我々の日常会話は、会話の参加者のみで構成されているわけではなく、会話外の第三者による割り込み（以下、外部割り込み）が生じる場面がある。Schegloff(2002)は、このような割り込みを「挿入となる割り込み」と呼び、この「挿入となる割り込み」によって割り込まれた側はそれまでの活動を中断し、挿入された行為行程が完了した後に中断を解除し、活動を再開させていると指摘している。Schegloffの主眼は、中断していた活動の「会話」が再開されているということにあり、その中身の「話題」が再開したか否かについては触れられていない。その他、従来の割り込み研究や話題転換、修復活動に関する研究は、参加者内で生じた場面を取り扱った研究が多く、外部割り込みの研究であっても、どのようなタイミングやどのような状態で割り込んでいくのかといった「割り込む側」のストラテジーに注目しているものが多い。

そこで本研究では、店員による飲食提供という外部割り込みが必ず生じる「レストランでの外食場面」を分析対象として取り上げ、外部割り込みによって話題を中断させた参加者たちがどのようなストラテジーで話題を再開させているのか、という問いをリサーチクエスチョンとする。そして、「すぐに話題を再開させるのか（以下、即時再開）、それとも一度間をおいてから再開させるのか（延滞再開）」と「どの参加役割を持つ参加者が再開させるのか」といった点に着目して分析を行い、「割り込まれる側」の話題再開ストラテジーの有り様を明らかにすることで、会話外の外発的要因による会話の場の変容を解明する端緒となることを目指す。

2. 先行研究

これまでの割り込み研究は、男女差(藤井,1998)や文末省略表現と割り込みの相互作用(萩原,2002)、割り込みが生じる要因(李,2011)、感動詞を対象とした割り込み研究(閔,2017)、など幅広い観点から研究されており、Schegloffら(1977)を始めとする会話の修復活動や、南(1981)や花村(2014; 2015)などによる話題展開に関する研究も多岐にわたる。しかしながら本研究では、外部割り込みによる話題の中断後、どのように話題を再開させるのかという点を研究の軸としておいているため、本節では、外部からの割り込みに関する研究(秋谷ら,2009; 高梨,2011)、及び、話題に関する研究(花村,2015; 串田,1995)を先行研究として紹介する。

2.1 外部からの割り込みに関する研究

秋谷ら(2009)は、会話外からの割り込みを可能にしている要素を分析課題にした研究を行なっている。複数人が共在し、複数の活動が多層的に生じている高齢者介護施設での高齢者とケアワーカーの相互行為を対象にしており、割り込む側の視線や行動、発話などを通して、どのように割り込んでいくのかを観察している。研究の結果、割り込む側の高齢者は、ケアワーカーと高齢者のこれまでの参加枠組みが分離したタイミングを見計らった上で割り込んでいることを見出した。一方的に割り込んでいくのではなく、割り込む側も、発話の相手となる成員が現在参加している枠組みから分離しようとしていることがわかった時点で割り込み、また、そのタイミングを見逃さないように、その成員の振る舞いを観察していると主張している。

高梨(2011)も、割り込む側の活動の文脈も重要であることを指摘し、複数の活動が平行している相互行為場面の中で、一方のグループから他方のグループの活動へ割り込む時にポインティングのような非言語モダリティの行動がある場面について事例分析を行なっている。その結果、割り込む側は発話に先行してポインティングなどを利用して言及したいものの周辺から割り込むこと、割り込み活動の開始後、両グループの全ての参加者が割り込み活動に関与するわけではなく、全体を把握しつつも、割り込み前の活動の継続や割り込み活動からの離脱と元の活動への復帰が見られたことを明らかにした。

2.2 話題転換に関する研究

花村(2015)は、発話内容の繋がりから見た話題転換の分類について「新出型」「再開型」「前提提示型」の3つに再整理している。このうち本研究と繋がり深いと考えられる「再開型」は、会話者同士の発話の流れの中で話題転換表現箇所があり、それが起こった後の話題が以前の話題と繋がる型のことを指す。これら3つの転換型によって、接続表現や言いよど

みなどの話題転換表現がどのように使い分けられているのかという研究を通して、「再開型」では「でも」や「なんか」といった接続表現が出やすく、言いよどみは出にくいことが明らかにされている。

一方、トピックと修復活動を関連づけた研究も行われている。串田(1995)は修復活動と話題推移の関係が両義的なものであることを論じたものである。修復の開始はトピックの再定立だけでなく、トピック性を再組織化させる可能性を持つと述べられ、分析を通して、会話中において修復活動が開始された時、後続するシークエンスはトピック再定立シークエンスとなるもの、トピック推移をもたらすシークエンスとなるものがあることが確認されている(串田, 1995: 3-4)。

3. 研究目的と研究手法

以上のように、割り込みや話題転換の従来研究は、会話の参与者内で生じた割り込みについての研究や、話題転換を対象とした言語的視点からの研究、さらに外部割り込みの場合であっても、割り込む側の文脈や振る舞いに着目したものがほとんどであり、外部割り込み後にどうやって話題は再開されるのかという点に注目した研究はあまり見られない。しかし、日常生活での会話場面で外部割り込みは少なからず存在する。したがって、従来研究されて来た割り込みや話題転換の研究だけではなく、外部割り込みとの関係を踏まえた上での話題再開についても考察する必要があると考えられる。

外部割り込みによって中断された話題は、割り込み活動終了後に消滅するか、再開するかのいずれかであるが、どのようなストラテジーで話題を再開させているのだろうか。本研究では、店員の飲食提供による外部割り込みが生じる外食場면을対象として取り上げ、(i)話題進行度、(ii)外部割り込みによって生じた話題の中断時間(以下、話題中断時間)、(iii)外部割り込みの種類(以下、割り込み種類)、(iv)割り込み位置、の4つを分析観点とし、話題はすぐに再開(以下、即時再開)するのか、それとも遅れて再開(以下、延滞再開)するのか、さらに会話のどちらの参与者が再開させているのか、という点に着目して参与者による話題再開ストラテジーの有り様を明らかにすることを研究目的とする。

研究手法としては、20代の知人同士である女性2人組の外食場面(平均1時間半)を3グループ撮影し、映像分析ツールELAN²を用いて参与者の言語・非言語的振る舞いを観察し、分析を行った。被験者が着席するところから会計が終わって店を出るまでを撮影し、さらに1品目が提供された時点から、席での会計が終わる、または会計のために席を立ち上がった時点までを分析対象として扱っている。自然な会話で出現した話題がどうなっているかに焦点を当てているため、被験者にテーマは与えず自由に話してもらった。

4. 結果と考察

4.1 話題再開パターンの分布

分析の結果、全データで生じた外部割り込み39回のうち、話題再開は17回であった。この内訳は、即時再開が8回、延滞再開が9回という結果になった。再開ストラテジーについては、中断直前の話し手が話題を再開させる「自己再開」が11回、中断直前の受け手が話題を再開させる「他者再開」が5回、どちらも判定し難い事例が1回確認された。この分布を、表1のように、

表1：話題再開パターンの分布

	自己再開	他者再開	その他	計
即時	7	1	1	9
延滞	4	4	0	8
計	11	5	1	17

(a)すぐに自己再開する(即時+自己再開)パターン、(b)一度別話題に移行してから自己再開する(延滞+自己再開)パターン、(c)すぐに他者再開する(即時+他者再開)パターン、(d)一度別話題に移行してから他者再開する(延滞+他者再開)パターンに分類すると、(a)が最も頻出するパターンであり、(c)は本データ中で一度しか生じなかった。

それぞれの話題再開パターンにおいて、言語・非言語による多様な調整が参与者間で行われていたことが半明したため、以下、前節で示した分析観点(i)~(iv)に着目した際の話題の再開傾向を示し、再開ストラテジーについては具体例を挙げながら説明を行う。

4.2 話題再開パターンの傾向

まず、即時再開と延滞再開の再開傾向についてであるが、話題中断時間が1~20秒と比較的短い場合や割り込み種類が「サーブ³」の時は即時再開しやすく、話題中断時間が21~40秒である場合や「サーブ+説明⁴」の時は延滞再開する傾向にあった。話題中断時間の長さによってこのような差が見られた背景には、参与者による先行話題への関与の度合いが時間の

¹ 話題進行度は、《始まり》(=話題が開始しそれについての発話交換が3回以内のもの)、《終盤》(=現話者の発話が終了したが、それに対する応答が見られないもの)、《途中》(=《始まり》や《終盤》以外に該当するもの)、《沈黙》(=参与者が1秒以上沈黙しているもの)、の4つのカテゴリーとした。

² <https://tla.mpi.nl/tools/tla-tools/elan/> (最終閲覧日2019年1月7日)

³ ここで言う「サーブ」とは料理提供のことを指す。

⁴ ここで言う「説明」とは料理説明のことを指す。

経過とともに低下する可能性が考えられる。また、話題を中断している間は会話の参与者同士の会話はほぼ見られず、まずは会話を復帰させることから始めなければならなかった。したがって、話題中断時間が長くなるほど、再度会話を復帰させるために一度別話題へ推移し、その後中断していた話題を再開させるといった延滞再開傾向が強かったことが示唆される。そして注目すべきなのは、今回のデータでは「サーブ」だと即時再開のみが、「サーブ+説明」では延滞再開のみが観察されたことである。両者の違いは、店員による料理説明の有無であり、料理という新奇の注目対象の出現に料理説明が加わることで「現場性のある話題」(花村2014)になりやすい。Goffman(1981)とClark(1996)によって提唱された参与役割を参考に考えると、割り込む側の店員は本来「傍観者(bystander)」である。しかし傍観者の店員が料理説明を開始すると、店員がフロアも保持した「話し手(speaker)」となり、その場にいた客は「受け手(recipient)」になる。「説明」がある外部割り込みでは新たな参与枠組みが生まれるが、「サーブ」のみではこのような変化は見られなかったため、参与枠組みの変化も話題再開パターンに影響したと考えられる。

次に、自己再開と他者再開の傾向の結果と考察を示す。話者移行適格場(以下、TRP)上ではない時に外部割り込みがあった場合に最も自己再開が多く(9回)、話題進行度が《始まり》の場合、話題中断時間が1~20秒の比較的短い場合も自己再開傾向にあることが明らかとなった。唯一、自己再開より他者再開が多く見られたのがTRP位置に外部割り込みがあった場合で、外部割り込みの直前の話者のターンが終了していたため、外部割り込み後受け手がターンをとりやすかったことが要因として考えられる。Schegloffら(1977)は修復活動での自己訂正へ至るプロセスには自己開始と他者開始があり、自己開始される自己修復が優位であることを主張しているが、「中断された話題の修復」もこの主張に当てはまるのではないだろうか。

4.3 言語行動から見る話題再開ストラテジー

西阪(2008)⁵を参考にして収録データをもとにトランスクリプト⁶を作成し、様々な話題再開の型を断片として下に示した。外部割り込みで途中となっていた発話の続きから自己再開したり(断片1:008C→015C)、疑問文を先行話者に投げかけることで中断していた話題を他者再開させていたりする事例もある(断片2:036F→037E)。また、断片3では「なんだっけ」という思い出し表現(047A)から「その:吉祥寺だ」と続け、「吉祥寺」というキーワードを自ら取り戻した例が、断片4では「そうそうそうそう」(062A)とつぶやくことでリズムを整え、話題を再開させている例が見られた。このような事例から、一度話題が中断されても、自分から話し始めた話題に関しては、話し手が自ら発話の途中部分から再度話し始めたり、もう一度その話題を取り戻すために自己志向的な発言をしたりすることで、話題を再開させている様子が明らかとなった。

【断片1:先行発話途中からの再開型】

007D:=え:うちもよく分かってない。
→008C:なんか少数(え)え:少数の時は
⇒<お茶をサーブ&説明(27.3)>
((6行省略(14.1)お茶の味について話題は推移))
→015C:そう、この少数の時は例えば
016C:=100部しか刷らないって時は

【断片3:思い出し型】

042A:でも今日そうだ、それで吉祥寺の
043A:一回こないだ先週?リハーサル終わったんだけど=
044A:=そんな時は1500円くらいにしてたしてたんだよね、体験料金。
045A:今日、体験ページが修正されて
⇒<ラストオーダー(19.9)>
046A:そうだ、これ一個食べてない。
(1.9)
→047A:なんだっけ:その:吉祥寺だ。

【断片2:他者による疑問投げかけ型】

→036F:Oもそうだよ。Oの
⇒<デザートを持ってきていいか尋ねに来て皿を下げる(15.0)>
(1.5)
→037E:O、どうしてる[んでしょね
038F: [ね、何してるんだらう

【断片4:つぶやき型】

056A:=beはつまりどういう人間でありたいか=
058A:=から、えっと(,)やりたいことを導き出すっていう
059B:(ふ::ん)
⇒<デザートサーブ&デザート説明(23.4)>
060B:めっちゃ美味し[そう
061A: [すこーい
(2.4)
→062A:そうそうそう、be、どうありたいか

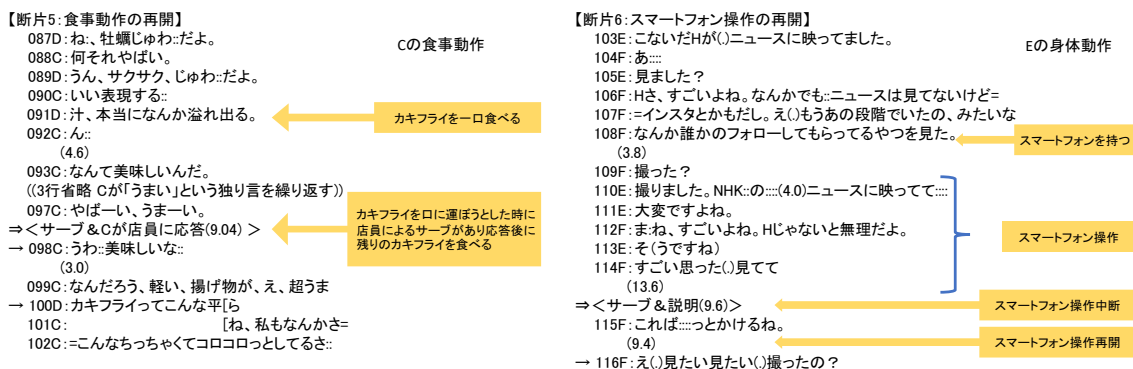
4.4 非言語行動から見る話題再開ストラテジー

次に、以下に取り上げた2つの断片は、発話自体は着地気味ではあるものの、非言語行動が話題を再開させた一因になりうる事例である。断片5において、外部割り込みによって一時的に店員に応答したため発話と食事動作を中断したCだが、外部割り込み中に残りのカキフライを食べており、その感想としての独白的な098Cの発話を受けて100Dの発話へ連なる形で話題は再開された。一方、断片6は、スマートフォンを用いて会話していた途中で料理サーブという外部割り込みが生じた事例である。Eはスマートフォン操作をいったん中断したが、外部割り込みが終了した115Fの発言直後に再びスマートフォンの操作を再開させた。それに気づいたFが「え(.)見たい見たい」と興味を示す発言をして、Hがニュースに映

⁵ 西阪仰(2008)トランスクリプションのための記号(v.1.2) <http://www.meijigakuin.ac.jp/~aug/transsym.htm> (最終閲覧日2019年1月7日)

⁶ トランスクリプト中の記号は以下の通り:「[」重複発話開始位置、「:」音声の引き伸ばし、「=」2つの発話間に途切れがない、「(.)」0.2秒以下の短い間合い、「(文字)」聞き取り困難な箇所、「⇒」割り込み開始位置、「↓」下降音調で弾みが見られた箇所、「。」語尾が下降音調で区切りが見られた箇所、「?」語尾が上昇音調、「文字」発話内で強調されていた箇所、「(数字)」沈黙秒数、「(文字)」発言の要約、注記「<文字(数字)>」割り込み内容とその秒数

っていたという話題が再開した。一見すると言葉によってのみ元の話題を手繰り寄せることができると思われがちであるが、実際にはこのように、食事動作の再開やスマートフォン操作の再開などの非言語行動によっても話題再開が可能となることが判明した。



5. おわりに

本研究では外部割り込みによって話題が再開する場面に着目し、4つの分析観点を通して、「割り込まれる側」の話題再開ストラテジーの有り様を明らかにした。話題進行段階や割り込み位置、話題中断時間、新奇な注目対象の出現や参与枠組みの変化によって即時/延滞再開の傾向に差が見られたことや、多様な再開ストラテジーが観察されたことから、参与者は言語・非言語要素を用いた相互行為の中で、調整や協働によって話題再開を試みていると考えられる。今回の研究対象ではないが「割り込まれる側の受け入れ態勢」や「食事と会話の関与配分」も再開傾向や再開ストラテジーに関わっている可能性がある。それに加え、男女間での違いや、人数での外食場面、食事を伴わない単なる会話場面との比較などを視野に入れ、研究をより深めていくことを今後の課題とする。

謝辞 本稿の執筆にあたって京都大学の高梨克也氏から有益なコメントを頂きました。この場を借りてお礼を申し上げます。

参考文献

- 秋谷直矩, 川島理恵, 山崎敬一 (2009). ケア場面における参与地位の配分—話し手になることと受け手になること— 認知科学, 16(1), 78-90.
- Clark, H. H. (1996). *Using language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 藤井桂子 (1998). 会話の「割り込み」に見る男女のインタアクションの違い 横浜国立大学留学生センター紀要 (5), 49-63.
- Goffman, E. (1981). *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 花村博司 (2014). 日本語の雑談会話における話題転換研究の方法: 話題転換はどこで行われ、どう分類されるか 言語文化研究 (9), 71-99.
- 花村博司 (2015). 日本語の会話における話題転換表現—新出型・再開型・前提提示型という話題転換の型による使い分け— 社会言語科学, 18(1), 75-92.
- 串田秀也 (1995). トピック性と修復活動—会話における『スムーズな』トピック推移の一形式をめぐって— 大阪教育大学紀要 第II部門, 44(1), 1-25.
- 李孝謹 (2011). 会話における割り込みと発話の順番取りシステムに関する一考察 言語学論叢オンライン版 (4), 1-15
- 南不二男 (1981). 日常会話の話題の推移—松江テキストを資料として—藤原与一先生古稀記念論集 方言論叢—方言研究の推進— 三省堂, 87-112.
- 荻原佳子 (2002). 日本語インタビューにおける「言いさし—割り込み」の連鎖—対人コミュニケーションの視点から—異文化コミュニケーション研究 (14), 57-77.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for communication, *Language*, 50(4), 696-735.
- (H. サックスほか(著), 西阪仰(訳) (2010). 会話のための順番交替の組織—最も単純な体系的記述 会話分析基本論集—順番交替と修復の組織 世界思想社, 7-153.)
- Schegloff, E. A. (2002). On “Opening sequencing”: A framing statement. In: Katz, J. E., & Aakhus, M. A. (Eds.) *Perpetual contact: Mobile communication, private talk, public performance*, 321-385. Cambridge: Cambridge University Press. (平英美(訳) (2003). 「開始の連鎖」について: 枠組み ジェームズ E. カッツ・マーク A. オークス(編), 立川敬二(監修), 富田英則(監訳). 絶え間なき交信の時代 NTT 出版, 413-494.)
- Schegloff, E. A., Jefferson, G. & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation, *Language*, 53(2), 361-382.
- (H. サックスほか(著), 西阪仰(訳) (2010). 会話における修復の組織—自己訂正の優先性 会話分析基本論集—順番交替と修復の組織 世界思想社, 157-246.)
- 高梨克也 (2011). 複数焦点のある相互行為場面における活動の割り込みの分析 社会言語科学, 14(1), 48-60.
- 間晁玲 (2017). 日常会話における割り込みに関する構造的な研究—連用従属節を対象に— 東アジア研究, 15, 117-140.